

【研究背景】

2023 年で創設 30 年を迎えた J リーグでは、数多くの外国籍選手たちがプレーしてきた。J リーグが 2023 年 2 月 1 日に発表した選手登録推移によると、のべ 81 カ国の選手が来日し、その中で最も多かったのはブラジル勢。その次に多かったのは韓国勢だった。こうした状況について藤田(2013)は「J リーグにブラジル選手が多い点は主要な欧州リーグと同じであり、韓国人選手の比率が高いのは J リーグならではの特性。サッカーの国際移住において文化的・地理的特殊性も無視できない」としているが、日本に来る韓国人選手が増えたのは単に日本と韓国が距離的に近く、同じ東北アジアの文化圏にあるということだけではないだろう。というのも、J リーグ初年度の 1993 年はわずか 1 名だったのだ。それが 10 年後には二桁になり、20 年後の 2013 年には 50 名を突破した。その後、やや減少したが、近年は増加している。地理的關係や同じ文化圏だけではない「理由」もあると考えられる。

【研究目的】

本研究は、「韓国からどんな選手たちが J リーグに来ているか」「なぜ増えたのか」を調査・分析したうえで、「韓国人 J リーガーの来日動機」を明らかにすることを目的とする。

【方法】

1.韓国人 J リーガーの定量調査

対象者は 1993 年シーズンから 2023 年シーズンまでの 30 年間に J リーグでプレーした韓国人選手(日本で生まれ育った在日韓国人選手は含まず、出身地が「韓国」となっている選手のこと)。調査内容は来日年齢、試合出場数などの J リーグ公式記録だけではなく、来日前の所属先(プロかアマか)、育成年代を含めた代表歴、国際大会出場歴など韓国サッカー協会(KFA)で管理する情報も照会して調査した。

2. インタビュー文献調査

定量調査では表れない移籍理由や選手個々の事情を探るために、筆者が過去に実施した 29 名のインタビューと、韓国メディアに掲載された 11 名のインタビュー記事などを対象とした文献調査を実施した。

3.アンケート調査

J リーグでプレーしたことがある現役の韓国人選手 31 名に対して、「来日動機」について聞いた。

4.報道記事の文献調査

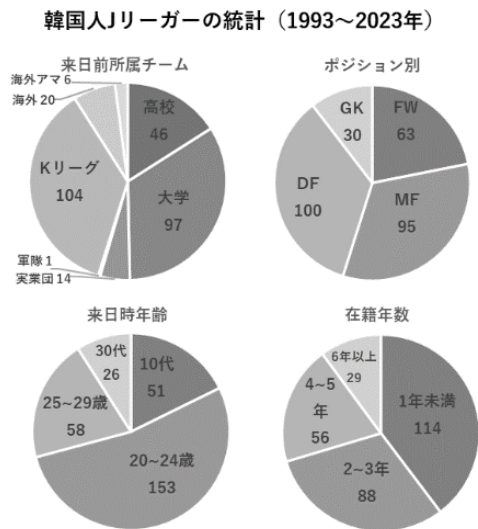
『The Changes of Paradigm in Sport Labor Migration and Its Significance: Focused on Korean Footballers』(Myung & Lee,2018)では K リーグ選手たちの海外移住(海外移籍)パラダイムの変化を明らかにするため、報道資料をニュースフレーム分析している。本研究でも同じ方法で「韓国メディアが J リーグ進出をどう報じてきた」を文献調査した。

【結果】

1.韓国人 J リーガー288 名の統計結果

日本でプレーした韓国人選手は 288 名。日韓ワールドカップ共催(2002 年)、アジア枠導入(2009 年)、J3 開始(2014 年)で増加。2005 年以降は J2 や J3 でプレーする選手が多くなっていた。また、KFA 資料によると 149 名が日本でプロになっていた。

■図 1 韓国人 J リーガーの統計(1993～2023 年)



日本の雑誌『スポーツグラフィック Number』(2013)や韓国メディア『Footballist』(2013)では韓国人 J リーガーの変遷を時代区分しており、本研究でも第 1 期(1993 年～2002 年)、第 2 期(2003 年～2008 年)、第 3 期(2009 年～2015 年)、第 4 期(2016 年～2023 年)で区分した。第 1 期は「代表実績のあるスター選手」が多かったが、第 3 期は高卒・大学中退して日本でプロなる選手が 70 名以上もいた。代表経験者も少なく、この流れは現在も続いている。実績がない無名若手選手が増えていることがわかった(表 1)。

■表 1 韓国人 J リーガー全 4 期の統計データ

年代	1993年～2002年	2003年～2008年	2009年～2015年	2016年～2022年
来日選手数	25名	30名	130名	103名
来日年齢	25.92歳	21.87歳	22.85歳	23.62歳
代表経験者	20名	10名	16名	19名
日本でプロ	6名	16名	76名	35名
来日後に代表	1名	6名	17名	2名
平均在籍年	3.28	2.97	3.09	2.1

2.文献調査による「移籍動機」

文献調査した選手 40 名の移籍動機を①スキルアップ②キャリアアップ③年俸・収益④環境的要因⑤改善の選択(海外進出願望、モチベーション維持など)⑥そのほか(国内制度への反発・回避、家族問題、先取感など)と、6 のカテゴリーを設定し、ひとつの記事内で最大三つのキーワードを抽出して、韓国人 J リーガーの「来日動機」を年代別に分析すると、当初は高額年俸・好待遇など「年俸・収益」、を来日理由に挙げる選手が多かったが、2009 年代以降は「スキルアップ」「キャリアアップ」が上位を占めるようにな

っていた(表 2)。時代や来日時年齢によって韓国人選手が J リーグに求め期待するものにも変化があったと思われる。

■表 2 40 名の移籍動機

年代	93-02 年	03-08 年	09-15 年	16-23 年
対象選手数	13 名	5 名	11 名	11 名
スキルアップ	5%	20%	24%	24%
キャリアアップ	5%	13%	15%	12%
年俸・収益	28%	13%	3%	12%
環境的要因	28%	34%	34%	34%
次善の選択	18%	13%	3%	9%
その他	16%	7%	21%	9%

3. アンケート調査

回答者 31 名中、25 名が「サッカー環境」を挙げた。

4. メディアが報じた「移籍動向」

30 年間で約 616 本に記事が確認できた。2002 年が最も多く(53 記事)、次に多いのが 2014 年だった。2002 年までは選手の活躍やインタビュー、特集記事が多かったが、2000 年代後半以降は移籍・契約更新・退団などを短く伝える人事報道が中心になっていた。

【考察】

1. 「アジア枠」が韓国人 J リーガーの増減にもたらした影響

アジア枠導入前の 2008 年、J リーグでプレーする外国籍選手の 19%が韓国人選手だったが、2009 年は 34%、2010 年は 42%、2011 年は 45%、2012 年は 54%、2013 年は 53%と外国籍選手全体の中でも韓国人選手の比重が増えて存在感が増した。アジア枠効果があったと考えられる。

2. 移籍動機で「年俸への期待」が少なくなったのはなぜか

第 1 期に来日した選手たちは K リーグ時代よりも 7~5 倍近い年俸を手にしていた。「J リーグ＝韓国よりも年俸が高い」というイメージ調査した結果、K リーグの年俸が高くなり、2010 年以降は J リーグの間に極端な年俸格差はないことがわかった。以下は直近 10 年間の K リーグ公式発表と日本の『日刊スポーツ』による J リーグ推定金額をまとめたものだ。(表 3)

■表 3 K リーグと J リーグの国内最高年俸と平均年俸

	国内最高年俸		平均年俸	
	K リーグ	J リーグ	K リーグ	J リーグ
2014	1億1206万円	1億5000万円	1638万円	2270万円
2015	1億1915万円	1億8000万円	1589万円	2020万円
2016	1億3759万円	1億6000万円	1414万円	2120万円
2017	1億5276万円	1億5000万円	1672万円	2340万円
2018	1億6114万円	1億4500万円	1988万円	2670万円
2019	1億3431万円	1億5000万円	1863万円	3510万円
2020	1億2289万円	1億4000万円	1802万円	3430万円
2021	1億2467万円	1億4000万円	1989万円	3220万円
2022	1億4949万円	4億円	2349万円	3370万円
2023	1億6309万円	4億円	3149万円	3630万円

J リーグでは平均年俸を公開していないため単純比較はできないが、J1 で約 3000~3500 万円、J2 で約 400~500 万円、J3 で約 300~400 万円(『年収ガイド』)とも言われている。J1 にはイニエスタ(推定年俸 20 億円)ら有力外国人の年俸も含まれており、日本人選手だけに限定した場合、J1 はもう少し低くなると思われる。つまり、K リーグと J リーグの間に極端な年俸格差はないため、年俸が強い来日動機になっていないのではないかとと思われる。

3. リーグの「環境」や「規模」が移籍動機に影響していないか

韓国でもサッカー環境の改善・整備が進むが、J リーグの選手・指導者の国際性、練習環境、クラブ運営、リーグ・システムなどの「サッカー環境」を評価する選手は多かった。特に熱気あふれるスタジアムでのプレーを渴望する選手は多く、K リーグと J リーグでは平均観客数でも大きな開きがあった。J リーグが K リーグよりも環境や人気が優れていることも、移籍動機に大きく影響していると考えられる。

■表 4 K リーグ 1 と J1 リーグのインフラ比較

2023年度	チーム数	選手数	専用競技場	リーグ収益	優勝賞金	放映権料	平均観客数
K リーグ	1部=12	418	10	約36億9,760万円	約5,500万円	約12億円	10,733人
	2部=13	442					
J リーグ	1部=18	567	30	307億9,400万円	2 億円	約217億円	18,993人
	2部=22	695					
	3部=20	596					
*リーグ収益はそれぞれの経営公示を参考							
* J リーグ放映権料は11年2395億円を1年単位で計算							
* Kリーグ放映権料は110億ウォン報道を参考							

4. 「スキルアップ」は日本サッカーへの「評価」の証ではないか

文献調査でスキルアップと答えた割合が第 1 期は 4%、第 2 期は 20%、第 3 期と第 4 期には 24%と着実に増えているが、この変化は日本サッカーが強くなり、韓国と実力伯仲の関係になったことによるところが大きいと思われる。その J リーグで自身をレベルアップさせたいという願望が韓国人選手たちにあると考えられる。

5. 13 歳の少年も公言した J リーグへの「憧れ」

学生レベルでの日本移籍も増加(2019 年は 67 名)。J リーグへの憧れを語る中学生などがいることもわかった。

【結論】

文献調査、アンケート調査、メディアの報道内容を通じて韓国人 J リーガーの移籍動機について分析した結果、かつては高年俸・好待遇などが強い動機になっていたが、現在は報酬を目当てに来る選手は少ない。いくつかの要素がかみ合うが、大きくは①海外リーグ挑戦願望、②自国よりも優れたサッカー環境、③スキルアップおよびキャリア形成が移籍動機になっていた。ただ、近年は韓国でも海外移籍先が多様化。特に欧州進出は王道とされ、育成年代のときから欧州に飛び込む選手も出てきた。「韓国人選手にとっての J リーグ」は今後、どのように変化していくか。海外移籍先が多様化が進む韓国サッカー界はもちろん、グローバル化を加速させようとしている J リーグにとっても、その動向を注視していく必要があると思われる。(了)